

イベント

この史代 × 竹宮恵子「マンガ表現論」を超えて



日時 2019年2月9日(土) 14:00～16:00

会場 京都国際マンガミュージアム 1階
多目的映像ホール

出演者

この史代 (マンガ家)
竹宮恵子 (マンガ家/京都精華大学教授/
IMRC センター長)

[司会] 吉村和真 (京都精華大学教授)

主催 京都精華大学国際マンガ研究センター
京都国際マンガミュージアム

担当研究員 伊藤遊

実施概要

この氏のマンガ作品「ギガタウン 漫符図譜」を紹介する企画展「ギガタウン・イン・テラタウン この史代の「漫符図譜」」(詳細は昨年の年次報告書を参照のこと。)の関連イベントとして開催された。

まず、同作が創作されることになった動機や、「鳥獣人物戯画」がモチーフとして採用されるまでの経緯などが、作家自身によって語られ、具体的な回を見ながら表現上の工夫について、この氏と吉村氏が解説した。

続いて、竹宮氏が、「マンガ表現論を越えてマンガ表現論って、本当は、何?」と題されたプレゼンテーションを行った。学術研究としての「マンガ表現論」の担い手が、「描き手」ではなく「読み手」に偏ってしまっていることによって、その関心が、マンガ表現における「大樹の先端の繊細な枝先」に集中してしまっていると指摘、そのことによって、マンガ表現の「骨太な大樹の幹」が失われるかもしれない、と訴えた。「昔、マンガはもっと簡素で、集約されたものだった」し、「シ

ンプルな略画で、読み取れる幅が大きい」かったとし、単純な線で描かれた「棒人間」で豊かな身体表現が可能であることを実演した。

また、こうした「骨太な大樹の幹」を研究することの活用の一例として、知的障害や自閉症などで一般的な読書活動が困難な人たちのための「LLマンガ」の開発が紹介された。

最後に、展覧会における「みんなで漫符を考えてみよう」というワークショップコーナーに集まった、新しい漫符を講評、その中で気に入った漫符を使って、この氏と竹宮氏が、即興で、一コママンガを描き、披露した。

